

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
安形 吉司 ^{よしじ}	男 性	83歳	18歳	中宇利

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

青年団で活動していた。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

青年団員の戦争に行かない者たちが集まり、重大放送があるということ
を聞き、当時ラジオがあった家の裏庭^{うらにわ}で天皇^{てんのう}の玉音放送を聞いた。ジージ
ーと雑音が入る中で、耳をすませて聞き入った。

「耐え^たがたきを耐え^{しの}、忍び^{しの}がたきを忍び…」の放送は、今も耳に残っているが、「終戦」という言葉は初めて聞いた。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

戦争が本当に終わったかどうか分からなかった。特別幹部候補生^{こうほせい}の令状
がとうとう来ず、複雑な思いだった。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「お父ちゃん、行っちゃあいかん！」

○ 出征^{しゅつせい}

まわりの次男・三男は、みな志願兵や徴用工^{ちようよう}*1として村をはなれ、15、16歳^{さい}
の若い子^{わか}も志願して軍隊に入っていました。私は、長男だったのでずいぶん迷
いましたが、豊橋^{はざま}の狭間国民学校で幹部候補生^{こうほせい}の試験を受けて、通信兵^{こう}に甲合格^{こうごう}
(甲種合格にあたる)したので待機していたら、終戦を迎えました。軍隊は、ま
ず飛行兵を先に採り、合格した者はすぐ入隊しました。次に次男、三男が採用さ
れ、長男は配慮されたことを後になって感じました。

当時出征^{しゅつせい}となると、まず村のお宮で、村中総出で武運長久^{ぶうんちようきゆう}の祈願祭^{きがんさい}を行い、
村境(中宇利と富岡の境。今、送迎^{そうげい}の地の石碑^{せきひ}が立っているところ)まで送って
いきました。(家族や親戚は、新城駅まで送っていきました。)のぼり旗を立て、太鼓
やシンバルで音頭^{おんど}をとり、軍歌を歌いながら歩きました。到着^{とうちやく}すると、区長さん
の激励^{げきれい}、武運を祈るあいさつ、出征者^{しゅつせいの}の別れのあいさつ、最後に万歳三唱^{ばんざい}で送り
ました。中には出征する人が、「弥栄^{いやさか}」(ますます栄えるという意味)を自ら三唱
(バンザイ)された方もいて、心に残っています。

元気なあいさつに圧倒^{あつとう}された人、さびしさが隠^{かく}せなかった人など、多くの人を
送りました。元気なあいさつをされた人ほど、遺骨^{いこつ}で帰られた方が多かったよう
な気がします。また、戦地に行く前に輸送船で魚雷^{ぎょらい}にあい、亡くなった方も多く、
さぞ無念であったことと思います。

*1 P-53-参照

村の適齡期^{てきれいき}の人はもちろん、後半になれば、補充兵^{ほじゅうへい}といって、高齢^{こうれい}の方にもほとんど召^{しょう}集^{しゅう}令^{しやう}状^{じやう}がきました。昭和19年の半ば頃から次第に戦況^{せんきやう}が悪化^{あくか}し、2～3日おきに遺骨^{いこつ}が届^{とど}いていたぐらい、多くの方が戦死^{せんし}していました。私の記憶^{きおく}では、子どもや年老いた親と妻を残^{しゆつせい}して出征^{しゆつせい}された30代の方が、何人かみえたと思います。

忘れられないのが、その中の一人です。村人と別れていく時、幼い女の子が、「お父ちゃん、行っちゃあいかん！行っちゃあいかん！」と泣きながら後を追うのです。だれも止められず、まわりで見ていた人たちも、すすり泣いていました。往く人も、後ろ髪^{うしがみ}をひかれる思いでいっぱいだったと思います。その時の光景は、今でも目に浮かんできます。幸いにもこの方は帰還^{きかん}されました。

安形守^{まもる}さんと村田雪夫^{ゆきお}さんは、昭和19年の5月と6月に出征^{しゆつせい}されましたが、無言の英霊^{えいれい}としてもどられました。両親^{おく}や奥さんだけでなく、5人の子どもたちがお父さんの帰還^{きかん}を待ちわびていたのです。残されたご遺族^{いぞく}の心の痛みは、思いあまるものがあります。

(写真集「新城」郷土研究会編より)

遺骨^{いこつ}が届くと、清水野小学校^{しみずのしょうがっこう}の忠魂碑^{しゆこんたい}のところで、諸団体^{しよだんたい}と生^{せい}が参加^{さんか}して「村葬^{そんそう}」が行われました。

終戦後、昭和58年に郷友会^{ごうゆうかい}（在郷軍人会^{ざいごうぐんじんかい}が前身。後に村中^{むらなか}が加入^{かじり}し、慰霊祭^{いれいさい}を行った）が、村境^{そんけい}の送迎^{そうげい}の地に記念碑^{きねんひ}を建てることになりました。それは、富賀寺^{ふかじ}の先代の住職^{しゆしやく}が発起人^{はつしじん}となって、決まったそうです。

石碑^{せきひ}に刻む歌^{きぎ}の募集^{ぼしゆ}があったので、2首応募^{おうぼ}しました。一つは、

「国のため 召^めされて期せん 帰るまじと この地で別れ 君は征^いきたり」と詠み、もう1首は、

「征く君が この地に立ちて 別れの言葉 耳朶^{じだ}に残りて 今も忘れず」と詠みました。最初の1首が採用されて、石碑^{せき}に刻まれることになりました。その際、

「繰り返すまじ 戦^{いくさ}なき世^{いの}を祈りて」という言葉を添えさせてもらいました。



▲ 東郷東小学校で行われた東郷村「村葬」の様子



▲ 中宇利と富岡の村境に建てられた送迎の碑

○ 当時の暮らし

出征された家庭への農作業のお手伝いを積極的に行いました。銃後を守る意識を強く持っていました。

昭和19年12月7日の東南海地震*1で、この地方でもかなりの被害が出ました。その復興の最中だった昭和20年1月13日の早朝、三河湾を震源とする大地震*2が起きました。各地で大きな被害がありましたが、新聞などで報道されることはありませんでした。お宮の鳥居が倒れたり、私の家の高さ約3mの石垣が、幅広くくずれたりしました。

空襲は、絶え間なくあり、豊川から牛久保あたりに落ちる焼夷弾の光と煙が、福津あたりからよく見えました。B29、B24の米軍爆撃機が編隊を組み、上空をガンガンと通過した。日本の対空高射砲は、敵機が去ってから撃つ始末。これで戦争に勝てるのか、と思った。

当時の子たちは、小学校3～4年生の頃から、家の手伝いをよくしました。この辺りの農家では、養蚕がさかんで、1年に3～4回繭を売って、そのお金で家計を助けていました。家に帰ると、すぐに養蚕で使う道具を川で洗う仕事をしたり、田んぼや畑（麦などを作っていた）での農作業を手伝ったりしていました。間食として、さつまいもを食べたり、小麦粉で焼き餅を作ったり、大豆を炒って食べたりしました。田舎だったので、都会に比べれば、食糧事情もまだよかった方でした。

今の子どもたちと比べると、当時の子たちは自分から家計を助けようとしていたことがずいぶん

違うのではないのでしょうか。また、戦争体験も含めて、つらく厳しい経験を数多くしてきたので、どんな苦しいこと、大変なことがあってもへこたれず、耐えられるという自信があります。これは、私たちの世代みんなにいえることです。

○ デマやうわさ

終戦直後、根拠のないうわさやデマが流れた。太平洋の海岸には、海に向かって大砲が並べられ、敵艦をむかえうつ態勢にあり、戦争は終わっていないとか、米軍が上陸してくると女性ははねられるか顔にすみをぬって隠れた方がいいとうわさされた。農作業をする気持ちにもなれず、氣力を失い、かなり動揺していた。そうした中で、一人の年配の人が、「お前たちはデマばかり気にして、仕事もしないのはどうかしておる。」と、黙々と働いていた姿が印象に残っている。



（写真集「新城」より）

昭和初期・場所不明

▲ 子守りをする子ども

*1 P-111-参照 熊野灘沖を震源とするマグニチュード7.9の地震。

*2 早朝の3時38分に起きた三河湾を震源とするマグニチュード6.8の直下型地震、死者2,306人。

安形吉司さんの当時の日記から

○ 昭和19年7月30日（日） 「19年の日照りの記録」

梅雨を思い出す天候である。本年の天候は、6月初旬以前の雨で、主に大麦がたくさんくさった。その後田植え期に入ったが、毎日かんかん^{かんてん}と照る。明けてもくれても旱天^{かんてん}*1 つづき、「ちゅうな」（イネ科の雑草）もしよげ、伸びる元気もない様子。水はかれ、田植えもとうていおぼつかない。7月20日から30日にかけてやっと植え付けた。

この間、天神様に雨乞い^{あまご}、ご祈祷いく日ぞや。千郷、一宮の各村長は、本宮山の山頂に断食のおこもりのことと聞く。7月19日頃より時おり曇りがちとなり、雨風がたびたび吹く。21日には天佑神助^{てんゆうしんじよ}（天の助け、神の助け）か、一変かきくもった雲はみる間に広がり、寸時^{すんじ}をおかずして大豪雨と化し、雷鳴^{らいめい}がとどろいた。これまで続いたひでりの逆なのか、終夜連日にわたり降り続いた。（昭和19年の米の収穫は、日照りのため昭和10年と比較し、50%の減収だった。）

○ 昭和19年8月26日（土） 「軍隊に志願すべきか思い悩む^{なや}」

この頃の雨に似合わぬ細い雨が降っている。盆^{ぼん}にて「おせがき」をしてもらう。苛烈な決戦下^{かれつ}、陸軍の幹部たる軍人の重要性にかんがみ、自分も陸軍を志望すべきか、この頃においては寝ても覚めてもこのことばかり考えている。今日も朝より校長先生の所に行き、意見をうかがう。

○ 昭和19年9月15日（金） 「新愛知新聞（中日新聞）1面記事より」

大本営陸軍報道部発表、親泊中佐^{しんぱくちゆうさ}の談話^{だんわ}に、ガダルカナル島*2の勇士がとりあげられた。食糧弾薬^{しょくりやうだんやく}の補給困難^{ほきゆうこんなん}、悪疫傷病^{あくえきしょうびよう}など、自然的悪条件にかかわらず、歯をくいしばりながらも必勝の信念を最後まで堅持して、銃がなければ竹やり^{だんがん}で、弾丸^{みつりん}がつかれば密林に火を放^{てきじん}って敵陣を火の海となし、手足がきかなくなれば歯で敵ののど笛をかききり、最後の歯が折れたら、ぐっと目を見開き、敵兵をにらみ殺すという不撓不屈^{ふとうふくつ}*3の闘魂^{とうこん}に燃えていたのである……。」

*1 夏の照りつける空のことをいう。

*2 ニューギニアの東に位置するソロモン諸島^{しよとう}にある島。海軍が飛行場を建設していたが、昭和17年8月、アメリカ軍の上陸^{じす}を許した。日本は連合艦隊が奪回^{かんたい}を図ったが、逆に戦力を失った。陸軍も投入されたが、輸送船が次々と沈められ^{がし}、弾薬も食糧もとどかなかった。そのため、半年間で25,000人の死者を出した。その半数以上は、餓死だったという。

*3 どんな困難にあっても決して心がくじけないこと。